

ねん がつ このか  
2021年1月9日

しゅ せんれい しゅじつ  
主の洗礼の主日

きくち いさおだい しきょう  
菊地 功大司教 メッセージ

ヨルダン川における洗礼者ヨハネによるイエスの洗礼の出来事は、「あなたは私の愛する子、私の心に適う者」と言う神ご自身の言葉によって、イエスこそが聖霊の充満であり、神の御旨の実現であることを高らかに宣言しています。

使徒ヨハネは手紙の中で、「神を愛するとは、神の掟を守ることです」と記しています。すなわち、イエスがキリストであると信じるわたしたちは、神を愛する者であり、神を愛するわたしたちは、神の掟を守ります。神の掟を守るとは、すなわち、神が望んでいるように生きることであり、それはわたし個人に留まるのではなく、この世界に神の望みが実現すること、福音の教えが実現していること、つまり神の国が到来することに他なりません。

わたしたちは、個人的に信仰を深めて、自らの内へと籠もってしまうのではなく、神の国が実現するようにと、外に向かって「出向いていく」教会になろうとしています。

きょうこう  
教皇フランシスコは、「福音の喜び」に、次のように記しています。

「福音の提言は神との個人的な関係だけで成り立つものではないということも、聖書を読めば明らかです。また、わたしたちの愛の応答を、助けを必要としている人のためのやさやかな個人的行為の単なる積み重ねだと理解すべきでもありません。・・・福音の提言とは、神の国、すなわち、世を治める神を愛することを示すことです。神の支配がわたしたちのもとに及んでいる限り、社会生活はすべての人にとって、兄弟愛、正義、平和、尊厳の場となるでしょう」(福音の喜び 180)

きょうこう  
教皇は、信仰が神の支配の実現へと向かっていなければ、その信仰に基づく良い行いも、「良心の平穏を守るだけの一連の行為、いわゆる「お好みの善行」になっている可能性があります」とまで指摘されています。

わたしたちが実現したいのは、わたしたちの人間としての思いや願いではなく、神の思い、神の計画、神の支配であります。

神の計画の実現ということを考えるとき、教皇フランシスコがこの一年を、「聖ヨセフの特別年」と定められたことは興味深いことです。

教皇は、使徒的書簡「パトリス・コルデ」を発表され、2020年12月8日からの一年を特別年とされましたが、その書簡において、「イエスの養父、聖ヨセフの優しさ、従順、受容の心、創造性をもった勇氣、労働者としての姿、目立たない生き方に触れ」、ヨセフこそは救い主に「奉仕する愛において完全に自己を捧げた」生き方を通じて、贖いの偉大な計画のための協力者となった指摘しています。(バチカンニュース)

内にこもらず出向いていく教会となろうと呼びかけるとき、なにか偉大なことを成し遂げなくてはならないと意気込んでしまったり、または自分にはそんな才覚はないとあきらめてしまったりすることもあるでしょう。そんなときに、教皇は、聖ヨセフの生き方に目を向けるように呼びかけます。偉大なことではなく、神の支配の実現のために、「優しさ、従順、受容の心、創造性を持った勇氣」をもって、神の望まれる社会の実現のために、言葉と行いを通じて、神の思いを具体的に示してまいりましょう。今この状況の下にあって、どういった言葉と行いが、神の思いに適っているのかを、祈りの内に識別いたしましょう。わたしたちも、ヨルダン川での洗礼の日のように、「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」と神から呼ばれるように。